

2026年6月  
編集長：中里美郷

## 目次

IPPNW in 長崎に参加しました！  
第2回 若造フォーラム開催  
国会議員会館前アクション

## IPPNW

International Physicians for  
the Prevention of Nuclear War

核戦争防止国際医師会議。  
数年毎に世界大会が開催され、各国で核廃絶の運動をしている医師らが集う。2025年10月の第24回世界大会の会場は長崎。当会から3人が参加した。2025年12月と2026年2月に報告会を行った。

IPPNW世界大会 長崎に参加  
報告会を開催しました

2025年12月11日(木)、松本協立病院「アメニティモール」にてIPPNW世界大会in長崎報告会を開催しました。会場参加30名、zoom参加32カ所からの参加でした。仕事終わりの病院職員や地域の方々が集まってくださいました。報告内容を紙面でご紹介します。

私は今回のIPPNW世界大会に、「広島ー長崎バイクツアー」から参加しました。これは、世界各国から集まった医療者・学生と共に、広島から長崎までの約450kmを8日間かけて走破する企画です。単なる移動ではなく、道中では平和資料館を訪問。夜には「核兵器廃絶に向けて政府に宛てたレター」の作成や熱いディスカッションを重ねました。共に汗を流し、苦楽を共有しながら語り合う過程で、理屈を超えた深い信頼関係と「心の結びつき」が醸成されました。長崎に到着した後、私たちの企画したフィールドワークで長崎大学医学部の資料館を見学、原子爆弾が人体にもたらした医学的な惨状を直視しました。そこで痛感したことは、核兵器が一度使われたら医療は無力であり、核戦争を防止し核廃絶に向かうことが健康を守る責任である、という反核運動の原点でした。



田村 大地 さん  
松本協立病院 研修医

IPPNW本大会でも3日間の日程で非常に充実した学びとディスカッションが行われました。詳細は清水さん光武さんのお二人に譲ります。

私は今、社会が直面している「軍事化」の流れに強い危機感を抱いています。世界中で軍事ブロックの強化が進み、軍事費が社会保障や教育の予算を圧迫しています。ドイツの大学に軍が勧誘に訪れる事例や、日本国内での防衛費倍増、非核三原則の見直しといった動きがあり、これは私たちが歩んできた戦後の歩みを根底から揺るがすものです。しかし、この暗い現況に対し、国際会議で出会った各国の若者たちの存在は大きな「希望」でした。国境を越え、核なき世界のために共にたたかう仲間と連帯できたことは、私たちが今後活動を継続していく上での揺るぎない糧となりました。

# IPPNW 世界大会 長崎に参加して



清水 克樹 さん

信州大学医学部

このように際限なく水や電力の消費量が増加していくことは、さらに核エネルギーに依存することになるとともに、次世代のことを考慮せずに有限な資源を搾取することにもつながります。現時点では、人間の脳はAIよりも低燃費&高効率であると言われています。そのため、可能な限り自らの脳を使うことで、個人的なレベルで電力消費量を削減していきたいです。

原子力発電は核エネルギーの平和利用と言われていますが、それに用いる技術は容易に軍事転用できてしまいます。原爆や原発事故の体験を有し、非核三原則を堅持している日本においても、その危険性があります。もう二度と核の悪夢を繰り返さぬよう、学び続けていくとともに、危ない橋を渡りそうなときははっきりと反対の声を挙げていきたいです。

## <被爆者からヒバクシャへ>

今回IPPNWに参加したことで、「被爆者」は日本だけでなく世界中に今も多く存在していることに気づかされました。核エネルギーを得るあらゆる過程において、人々の生活や健康が脅かされる構造は「核による植民地主義」とも言われています。例えば、ウラン採掘によって先住民族の土地が収奪されたり、地表に放出された放射線によって周辺地域の住民に健康被害が出たりしています。これらは、原発から得られるエネルギーを使用している全員が、等しく加害的側面を持っていると言えます。

昨今AIの急速な発展によって、世の中のシステムが大きく変わろうとしています。その一方で、その普及により消費電力量・水量が急激に増加するという負の側面もあります。IEA(国際エネルギー機関)によると、2026年のAI関連の電力需要は、2022年に比べて約2.2倍も増加すると予測されています。

## <核抑止を具体的に考えてみる>

IPPNWの会議の中で、田中照巳さん(日本被団協)は、「核兵器は戦略的な兵器ではなく『悪魔の道具』で、それを使用することは『一人の人間が数万人を殺すと決めて実行すること』」と言及しました。核兵器は核抑止論に支えられています。日本政府が重要だという核の傘は具体的にどんなものでしょうか？

核兵器の維持には年間14兆4,000億円(1分あたり16億5,000万円)という莫大な費用が費やされています。また、核抑止が失敗する確率は年間わずか0.5~1%ですが80年間積み重なることで、核戦争が起こる確率は55%にも上ります。これまで80年間核戦争にならなかったのは、ただ運が良かっただけであり、今後も持続可能であるという根拠はどこにもありません。いま世界には、すぐに発射できる核弾頭が9,615発あります。戦争で核兵器が一発でも使われれば直ちに核戦争になり、数時間で数千万人が犠牲となり、地球は「核の冬」に覆われます。世界中で太陽光が遮られ、気温が急降下し、作物は育たず、飢餓が世界中に広がります。文明は崩壊します。医療も機能しなくなり、医療を必要とする人からまず命

が奪われていきます。そう考えると、核の傘は私たちを守る完璧な盾ではなく、むしろ「多くの穴が開いた壊れた傘」に過ぎないことがわかります。

核兵器は、ウラン採掘から廃棄物処理に至るまで、いまこの瞬間も土地や水を汚染し人々の健康被害を生み出し続けています。さらに核兵器を脅しに使うことは、被爆者を見せしめにして外交のカードに使っているということにもなります。これらは、一部の人々(多くがマイノリティ性を持つ人々)を犠牲にすることで成り立つ「核植民地主義」の構造です。核の傘に頼り、核エネルギーに依存してしまっている私たちの現実を見つめ、立ち止まる必要があります。そして犠牲になっている人々の尊厳を取り戻さないといけません。いま核兵器に費やされてしまっている資金や力を、人々の生活を豊かにするために、核廃絶のために使う未来を選びとるために、行動していきたいです。



光武 鮎 さん

松本協立病院 小児科医

# 第2回若造フォーラム開催！

## 若造フォーラム

当会の事務局メンバーは、戦争の歴史を学ぶ中で、核廃絶と日本の加害責任について向き合うことは、平和な社会を目指すための両輪の取り組みであると考えようになりました。そんな中、「長野県内には平和について取り組む若者がたくさんいる！みんなで交流したい」と考えるようになり、2025年7月に第1回が開催され、今回で2回目の開催です。

2月23日、長野県内で平和について取り組む若者たちがあつまり、展示や発表を行う「第2回 信州の若者が紡ぐ平和創造フォーラム（若造フォーラム）」企画が開催されました。日頃それぞれの場所で活動している若者同士がつながり、学びや実践を共有する貴重な機会となりました。今回のテーマは「支配者はだれ？足元から考える植民地主義」。当日は4つの団体によるステージ発表と、会場ではさまざまな団体による展示も行われました。

全体を通して、それぞれの言葉で植民地主義や加害の問題に向き合い、考え続けることの大切さが確認される企画となりました。多様な実践が交差する中で、新たな気づきやつながりが生まれ、今後の活動へとつながる意義深い一日となりました。

### <ステージ発表>

私たち「長野反核医療者の会」からは、国際核戦争防止医師会議（IPPNW）の報告会に参加したメンバーが登壇し、「グローバル被爆者」や「核植民地主義」といった視点から、核の問題が特定の地域にとどまらず、世界規模で不均衡に押し付けられている現状について報告しました。

「沖縄と私たち」は、昨年8月に実施した沖縄でのフィールドワークを振り返り、これまでの活動の蓄積と今後の展望について発表しました。現地での体験を通して、日本国内において沖縄に基地負担が集中している現状を捉え直し、国内における植民地主義的な構造について深く考えさせられる内容でした。

「松代大本営平和祈念館ガイド」の中瀬さんからは、松代大本営地下壕でのガイド活動をもとに、朝鮮人労働者の歴史と語りが紹介されました。ここでは、植民地主義における「支配／被支配」という関係性の問題が提示されるとともに、その歴史を現代に生きる私たちがどのように受け止め、向き合うべきかについて考える機会となりました。

「長野吉田高校」の生徒からは、韓国・済州の高校生と共同で取り組んだ「日韓歴史教科書プロジェクト」についての報告がありました。国境を越えた若者同士の対話と協働を通じて、歴史認識をともに考える取り組みの意義が伝えられました。

### <展示>

「松本強制労働調査団」は、昨年11月に韓国を訪問して学んだ日本による植民地支配の歴史や光州事件に関する報告をまとめた資料を展示しました。

「ヒバクシャの願いをつなぐプロジェクト」は、県内の被爆者や被爆2世へのききとりをもとに制作した冊子と、それを活用した授業で寄せられた感想、さらに県内での講演活動の反応などを紹介しました。

「本読みデモ」は、パレスチナやイスラエルに関する書籍を読み合い、対話を重ねながら理解を深める取り組みを紹介し、参加型の学びのあり方を提案しました。

「しろうと文庫」は、植民地支配について独自に調べ、まとめた展示を通して、「私たちの加害について考えませんか？」と来場者に問いかけました。

### <わかぞうダイアログ>

企画の後半では、「若造ダイアログ」と題した対話の時間が設けられました。テーマは「何を基準に“進んでいる／遅れている”“優れている／劣っている”が決まるのか」「誰かの傷を学びにしてよいのか」といった問いです。参加者一人ひとりが感じていることや日頃抱えている疑問を率直に共有し、立場や経験の違いを越えて語り合う場となりました。

(中里美郷：事務局メンバー)



日本政府に核兵器禁止条約への参加を求める

# 国会議員会館前アクション



反核医師の会として署名提出



ABC for Peaceの稲原さんと



寒空の下、議員会館前に700人

2025年11月21日に日本被団協の呼びかけで開催された、「日本政府に核兵器禁止条約への参加を求める議員会館前アクション」に参加しました。

日本政府に核兵器禁止条約への参加を求める署名は、なんと344万9012筆も集まっていました。各地域の被爆者団体や、高校生平和ゼミナール、新日本婦人の会などとともに、反核医師の会として署名の共同提出に参加しました。2023年の核禁条約締約国会議参加の際に一緒にニューヨークで時間を過ごした被爆者や市民団体の先輩方と再会することができたり、反核法律家協会に参加している法学部生さんと知り合うことができたり、反核平和に取り組む人たちとの関わりを感じることができ、とても嬉しかったです。

署名提出の際、長崎の被爆者の横山照子さんの言葉に会場が一層静まりました。「『核兵器のない世界を見て死にたい』と言って死んでいった被爆者の人たちの言葉を思い出す。このままでは地球は滅びてしまう。日本政府は、被爆者が死ぬのを待っているのではと思ってしまう」。署名を受け取る外務省の官僚の目をまっすぐ見据えて、静かに語りました。

閉会の挨拶で愛知の被爆者の金本弘さんは、「この集会に参加できない被爆者、支援者が全国にいます。天国にもいます。その人たちにも届けましょう。政府が応えるまで何回でも集会をやりましょう。今日はスタートです」と語り、会場みんなで「原爆許すまじ」を歌いました。

前半の署名提出には311人（うち被爆者は100名近く）、後半の議員会館前集会には700人が参加したとのこと。この集会の直前に、高市首相が非核三原則の見直しを検討していることが報じられたこともあり、被団協からの「非核三原則の堅持、法制化を強く求める」声明も発信され、被爆者や市民の怒りを示す集会になったと思います。

3月に入り、核保有国であるイスラエルとアメリカが、核兵器を口実としてイランとの戦争を開始しました。フランスは核戦力の増強と、欧州各国との核協力計画を発表しています。被爆者の方たちが身や心を削りながら生きてきた人生を、いとも簡単に蔑ろにするような日本政府や世界の核保有国の強行姿勢に、怒りややるせなさでいっぱいになってしまいます。人々が殺されて、人権がなくなっていく、どんどん悪くなっていく世界に、どうしたらいいのだろうと途方に暮れてしまいます。でも、「何回でもやりましょう。今日はスタートです」という金本さんの言葉を思い出します。今まで何度も何度も行動してきた被爆者の方とともに、わたしもできることを続けたい、と思います。

(河野絵理子：事務局メンバー)

## 第5回定期総会・記念イベント開催しました

4月29日（火・休）松本市勤労者福祉センターにて、第5回定期総会を開催しました。今回、記念イベントとして、様々な場に対話の営みをされている作家の永井玲衣さんをお呼びして対話の場「おすおすダイアログ」をおこないました。詳細は次号会報で詳しくお伝えします。

